

点描の絆

登場人物

野崎俊介（のざきしゅんすけ） ……安芸泰山の弟子
野崎俊介（少年の頃）
安芸泰山（あきたいざん） ……日本画の巨匠
藤本勝治（ふじもとかつじ） ……俊介の行方を求めて佐賀から上京して来た老人
秋山晃一（あきやまこういち） ……安芸泰山の息子
村上八重子（むらかみやえこ） ……秋山家の家政婦
村上八重子（若い頃）
早坂晋（はやさかすすむ） ……安芸泰山記念館の設計を任された建築家
水島朱実（みずしまあけみ） ……雑誌記者
今村武（いまむらたけし） ……俊介の同級生
今村武（少年の頃）
吉田恒夫（よしだつねお） ……少年・俊介の同級生
戸越望（とごしのぞみ） ……俊介の故郷の幼馴染み

※本作では、過去と現在のシーンが混在し、同じ人物を別の役者が演じたり、なりすまし等がありますので、台詞上の話者の役名は観客目線で表記します。

今は亡き安芸泰山の書齋、図面に見入る晃一。テーブルを挟んで座る建築家の早坂。

晃一 うん：いいですね：素晴らしい。いや、完璧ですよ。

早坂 ありがとうございます。

晃一 泰山の：（感極まる様子）父の喜ぶ顔が目には浮かぶようです。

早坂 そうあつて欲しいと願いながらやらせて頂きました。これが完成したら、私にとつても間違いなく代表作になる筈です。

晃一 （設計図から目を離さず）本当に細部に至るまで、お願いしたことをすべて聞き届けて頂いたんですね。

早坂 そのつもりです。

晃一 父が生涯をかけてえがいた作品を飾る記念館です。何としても最高の器を用意したいと思いました。だから早坂さんにはどんなに嫌な顔をされても満足いくまで設計図を書き直して貰うつもりでした。絶対に妥協したく無かったんです。

早坂 勿論です。

晃一 まさか一回目でこれほど完璧に……いや本当に嬉しいです。

早坂 お父様を思われる安芸山さんの熱意に打たれたんですよ。

晃一 早坂さん、確かに父の遺骨は今墓に眠っていますが、これが出来上がったら魂はきつとここに戻って来るって私は信じてるんです。

早坂 最初の打ち合わせの時にそう仰ってましたよね。

晃一 父が親しい人に請われても、最後まで手放したがりななかった、それこそ安芸泰山の代表作と呼べる作品ばかりが飾られる記念館です。父の魂はきつとここに帰って来ます。本当にありがとうございます。いえ、感謝するのは私の方です。今回のご依頼を受けて、私は本当に多くの事を学ばせて頂きました。それに、それ以上に貴重な体験も。

晃一 貴重な体験、

早坂 はい。実はこの設計図、図面を引く作業自体にはそれ程時間はかかっていません。

晃一

嘘でしょう、こんなに良く考えられているのに。

早坂

本当です。いや、むしろ通常より短時間で仕上げました。

晃一

本当ですか、でも：（設計図に触れながら）例えばこの明り取りの小さな窓、このアイデアはどこから来たんですか。

早坂

ああ、それ、そこに気づいて頂けるなんて、さすが安芸泰山画伯の息子さんですね。

晃一

これは誰が見ても気づきますよ。この窓がここにあることによってその先に繋がる長いホールへのアクセントになっていますよね。

早坂

そうです。

晃一

直接絵を照らす光でもないのに、この自然光がホール手前の壁に当たってその先に控える展示スペースへの期待を掻き立てる効果を出しています。

早坂

おそらくその先の長いホールに飾られるのは、いくつかある連作になるかと思っただけです。

晃一

その通りです。

早坂　ですから前のスペースと区切って、単調にならないようにと、その為の工夫です。

晃一　素晴らしい。建築家の先生というより、まるで美術家の視点で設計されたような建物だ。あ、それからこれ、ここに欄間を配置するなんてまさに絶妙です。

早坂　ありがとうございます。

晃一　こうやって完成予想図を見ているだけで私には今すぐどの絵をどの壁に掛けるか決めることだって出来ます。

早坂　そう言って頂けると。

晃一　例えば階段を上がって視界に飛び込んでくる正面のこの壁だったら、

早坂　上総の海、波と春月。

晃一　…早坂さん…。

早坂　分かりますよ、そこにはそれしかないでしょう。

晃一
ええ、でも…。

早坂
単なる美術館ではなく、一人の作家の記念館で半永久的に同じ絵を飾り続ける訳です。だからまず、お父様の作品を勉強させて頂く、その方が近道だと思っただけです。どんな料理を盛り付けるのか分かんなく、器を用意するなんて出来ませんからね。そうではありませぬか。

晃一
確かに、その通りですが、

早坂
何度もこちらに伺って、しつこく絵を見せて頂いていたのもその為です。

晃一
いつになったら設計を始めて頂けるのか、正直心配していました。

早坂
お父様の著書も手に入るものは全て読ませて頂きました。所在が分からなくなっている絵も図書館で作品集を見たりネットで検索したり、知り合いの画商に話を聞いたりと、そんな勉強の方に時間の大半を割いたと言ってもいいくらいです。

晃一
…何とお礼を言ったらいいのか。

早坂

その結果、私は不思議な体験をしたんです。本当に不思議なんです。が、そうやって学んでいく内に安芸泰山先生の絵一つ一つが、まるで私に語りかけるように設計のアイデアをくれたんです。そう、こんなスペースに収まりたいって絵が訴えてくるんですよ。大げさじゃなく本当にそうなんです。こんな体験は初めてでした。

晃一

父の絵がそんな風に：分かるような気がします。いや、分かりますよ。建築と日本画、フィールドこそ違ってもきつと同じように優れた才能を持つ芸術家同士の感性が共鳴したんですね。やっぱり早坂さんに依頼したのは正解でした。

早坂

私の事はともかく、とにかく学べば学ぶほど、私はお父様の絵に魅せられました。おこがましいようですが、お父様の作品は一つ一つが個性的で、同じタッチの絵がそれぞれにまったく別の歌を歌っているんです。

晃一

その通り、それが安芸泰山の絵です。

早坂

勿論、素人の私に今回收藏される三十七点すべての作品の配置を言い当てることは出来ないでしょうが、少なくともその半数に関しては、この場所にはこの作品しかないって言えます。お父様の絵は、それほど雄弁です。

晃一

早坂さん、私も父も本当にラッキーです。たまたま見かけた雑誌の新進気鋭の建築家という記事、掲載されていた写真が素晴らしかったので連絡させて頂きましたが、あれは住宅の設計でしたよね。今だから言えますが、美術館だとうなるのか、正直、若干の不安はあったんです。それが、こんなに素晴らしい：いや、唯々感謝です。

早坂

私の方こそ。こういう類いの設計に関しては実績の無い私を選んで頂いて、恥ずかしながらこのお話を頂くまで日本画については何も知らなかった私が、今は安芸泰山記念館の設計を任されたということでもない名誉に身が震える思いでいるんです。

晃一

ありがとうございます。

早坂

では、具体的な施工の日取りや業者の選定に進ませていただいてよろしいでしょうか。

晃一

お願いします。（再び図面に目をやり、満足げに見る）

早坂

それじゃまず、施工業者ですが、是非紹介したい会社があるんですよ。規模は小さくて、まあ会社というより工務店という感じなんです。技術力だけは確かで、私も何度か一緒に仕事を、

晃一

早坂さん、

早坂

はい、

晃一

これ…違うんじゃないですか。

早坂

えっ、

晃一

これですよ、このザクロの木。

早坂

ああ、それですね。それは実は、

晃一

私、父のアトリエと、その窓から見える庭の造作だけは手をつけな
いで下さいってお願いしましたよね。

早坂

ええ、分かってます。ですから、

晃一

これじゃ駄目です、やり直してください。

早坂

あの、秋山さん、アトリエはまったく手をつけずに残します。ザク
ロの木もほんの少し、五十センチほど北側に移植するだけです。そ
れ以外は一切、

晃一

だから駄目なんです。アトリエも庭の情景もそのまま残したいって

初めに言ったじゃないですか。

早坂
ですがほんの五十センチの移動です。ザクロの木と敷地の境界の間を通るホール幅に余裕が無いんです。本来伐採するかまったく別の場所に移植したいところなんです、

晃一
(叫ぶ) ふざけるな、

早坂
：秋山さん。

晃一
：すみません、つい：でも、アトリエの窓から見た情景は、ほんのわずかでも変えたくないんです。

早坂
そうになると、設計を根本的に変えなくてはならないんです。つまりまた一からやり直すことになるんです。いいですか、ここを見て頂きたいんですが、(図面を)

晃一
そうしてください。

早坂
えっ、

晃一
だから、また一からやり直して下さい。

早坂

：分かりました。

晃一

すみません。

早坂

：設計はやり直します、しかし、

晃一

「残雪」の、情景なんです。

早坂

え、

晃一

父の作品で唯一、アトリエから見た庭を描いた作品です。「残雪」と言います。

早坂

ええ。陽の光に輝くわずかに残った雪、深緑の苔から生まれ出る、新鮮な空気さえ感じられる素晴らしい絵ですね、憶えていますよ。

晃一

庭の草木をモチーフにした作品は他にもありますが、庭全体を描いたのはあの一枚だけです。あの絵を見た時に、父がアトリエのどこから庭を眺めていたのか、分かるようにしておきたいのです。

早坂

：そういうことですか。

晃一

時が過ぎたら、父が作品にしたほとんど風景は変わっていくでしょ

う。新しい建物や道が出来るのを止める事は出来ません。でもあの絵「残雪」にえがかれた情景だけは、こちらがその気になれば描かれた時のままの姿をずっと残す事が出来て、作品とモチーフを見比べる事が出来るんです。アトリエの中で、絵を描くときに父が庭を眺めていた、同じ視点に立つことだって出来るんです。それを残したいんです。

早坂

：分かりました。今度こそ、ちゃんと理解しました。

晃一

すみません、わがままばかりで。

早坂

私の方こそ、大変失礼な事をしてしまいました。これはもう、(図面を巻いてケースに入れ、立ち上がる。鞆も手にする)

八重子

失礼します。(お茶を載せた盆を手に、下手奥より登場)あら、もうお帰りでいらつしやいますか。

早坂

はい、今日はこれで。

八重子

今、奥にお食事の用意を済ませたところなんですよ。

早坂

すみません。

八重子

今日はお車じゃないって仰ってたから、少しだけお酒の用意も致しましたのに。

早坂

ありがとうございます。でもまた今度、

八重子

今日は煮物が自分でも驚くくらい美味しく出来たんですよ。是非召し上がって頂きたいのに。

晃一

八重子さん、

八重子

じゃあ、次は必ず。

早坂

申し訳ありません。

晃一

早坂さん、本当に申し訳ありません。

早坂

いえ、私が悪いんです。気にしないでください。大丈夫ですよ、庭の木には一切手はつけません。

晃一

ありがとうございます。

会釈して上手に退場する早坂、後に続く八重子。二人を眼で見送った後、窓際に佇む晃一。しばらくして八重子が戻ってくる。

八重子

お茶、召し上がります。

晃一

いや、もう下げていいよ、ありがとう。

八重子

：ザクロの木は、あきらめても良かったんじゃないですか。

晃一

駄目だ。

八重子

何もかも思い通りという訳には、

晃一

何もかもなんて思っちゃいけないさ。あの絵の情景は特別だ。

八重子

すみません。些細なことにこだわって、肝心なことを台無しにしないようにって、心配しただけです。

晃一

もういいよ。

八重子

昼間、外出してらっしゃった時に、お電話がございました。

晃一

電話、誰から。

八重子

藤本さんと仰ってました。

晃一

藤本、

八重子

心当たりがお有りですか。

晃一

知らないけど、どうして。

八重子

野崎俊介さんの行方を捜している、話を聞きたいから近々お邪魔しても良いでしょうか。

晃一

：八重子さん、何て答えたの。

八重子

旦那様は留守がちだからお約束するのは難しいとお伝えました。

晃一

それで、その人納得したの。

八重子

そんなに忙しく何をなさってるんですかって、だから、亡くなったお父様の記念館設立の準備で、日本中を飛び廻っていらっしやるって答えました。

晃一

：そう。

八重子

とっさに口から出たんですけど、自分でもうまいこと言ったって思

ったんですよ。それで宜しいですよね。

晃一
ああ。

八重子
でもどっちにしても、きっと一度はおいでになると思いますが、そんな口ぶりでした。

晃一
連絡が有ったら、また適当に答えておいて。もし僕がいるときに訪ねて来ても留守だと言って取り継がなくていいから。

八重子
分かりました。

晃一
歳は幾つくらい。

八重子
もちろん声の感じですけど、お年寄り。でも感じの良い人でしたよ、元気の良い九州弁で。

晃一
：九州弁。

八重子
はい、佐賀の唐津って仰ってました。

照明変わり転換明かり、八重子は湯呑をのせた盆をもって下手に退場。入れ替わりに上手より藤本登場。晃一と対面してソファーに腰を下ろす。再び明るくなる舞台。

藤本

いや、訛りは国の手形って言いますけん、子にも孫にも方言は恥ずかしゆうなかって教えて来たとですよ。ばってん、実際にこっちに来て初めて分かったとですよ。私が電話で話しよったら、こっちの人みんな振り返らすもんね。いや、さすがに恥ずかしゆうなって、知らず知らず声の小さくなるですよ。(笑)

晃一

私は嫌いじゃないですよ、方言。

藤本

そうですね。じゃあお言葉に甘えて楽に話させて貰います。(笑)ばってん、留守がちで聞いとりましたけん、会えんちやなかるかって覚悟して来たとですよ。そしたら玄関先で声かけた相手がご本人やもんびつくりしたあ。

晃一

そうですね。

藤本

亡くなった先生の記念館ば建てるのに日本中飛び回つとらすて聞いたけん。

晃一

やっどひと段落しました。

藤本

そりや良かった。あの、いつも電話に出られる、お手伝いさんですかね、あの女性は。

晃一 八重子さんですね、今日は休みです。

藤本 八重子さん…ここにお住まいじゃなかとですね。

晃一 ええ、通いの家政婦さんです。

藤本 そうですか、通いで…もう長かとですか。

晃一 ええ。長いこと、父の世話もして貰ってました。

藤本 そうですか。いやあ会いたかったですねえ。電話だけですばってん、もう五六回は話しましたけん。親しみ易か人で、お会いするのば楽しみにしとったとです。

晃一 あいにくのタイミングでしたね。

藤本 まあ、今度伺う時の楽しみちゆうことで。

晃一 今度、

藤本 はい、暫くは東京におるつもりですけん、気長にやろうて思うとります。

晃一 あのと、ご用件は父の下で学んでいた野崎俊介さんの消息ですよね。

藤本 はい。

晃一 でしたら、残念ですがお役には立てません。私は一年前までフランスにいました。父が死んで、日本に戻ったんです。

藤本 ほくフランス、フランスちゆうたら、あのフランスですか。

晃一 フランスは一つしか無いと思いますが。

藤本 いや勿論です。ばってんヨーロッパでしょう。ヨーロッパは良かです。私も海外旅行は韓国にだけ行った事はあるとです。二泊三日グルメ垢すりツアーちゆうのに行きました。韓国も良かです。ばってん、いや、やっぱりヨーロッパは海外でも別格じゃなかですか。それで、フランスでは何をしたられたとですか。

晃一 答えなきやいけませんか。

藤本 あ、いや別に、そういう訳では、

晃一 いいでしょう。日系商社の現地法人でサラリーマンをしてました。

若い時に現地採用になって、何年も日本には帰っていませんでした。

藤本

ほく商社マンですか。

晃一

父の訃報を聞いた時も仕事の都合がつかず、葬儀にすら間に合わなかった親不孝者です。

藤本

そうですね、そりゃあ大変やったですネ。しかし、向こうでお仕事ばされとつたとなら、落ち着いたらフランスに戻ろうとは思われなかったですか。

晃一

まったく畑違いの仕事をしてきましたが、父のことは尊敬していました。父が残した業績は私のわがままで放っておいて良いレベルのものでは無い、それくらいは分かっていましたから。

藤本

ご立派な心構えです。きつとお父さんも喜んでられますよ。

晃一

ですから、私はその野崎という人については何も、

藤本

ばってん、お手伝いさんをご存じですよ。

晃一

え、

藤本 八重子さん、でしたか。長いことこちらで働いとられるってことや
ったから。

晃一 勿論、知っているでしょう。でも、野崎さんがここにいた間の話だ
けですよ。ここを出た後の足取りなどは、八重子さんも知らないと
思います。

藤本 いや、話が聞けたら何でも良かとです。今は手がかりゼロですけど、
まあ、手がかりの手がかりにでもなれば、それだけで。

晃一 : 藤本さん、何故、野崎さんの行方を捜していらっしゃるんですか。
失礼ですが、彼とはどんな関係で。

藤本 関係って：直接は何も、知人の知り合いとでも言うか。

晃一 じゃあ、その知人の方に頼まれて。

藤本 うくん、頼まれたと言うより出しゃばつてと言う感じですかね。年
寄りの道楽でやつとります。

晃一 すみませんが、分かるように説明していただいてもよろしいですか。
藤本 こりゃ失礼しました。知人というのは、三年前に亡くなってしま

ましたが私の幼馴染で、唐津で児童養護施設ばやとりました。養護施設、分かりますか。

晃一
分かります。

藤本
そうですか。まあ、昔で言う孤児院ですよ。今は後を継いだ娘さんが園長をしておりますが、野崎俊介君は小学校六年生になるまでここで育ったとです。

晃一
じゃあ孤児だったんですね。

藤本
そうですね。簡単に説明しますと、野崎俊介君が五年生の時に描いた絵が全国コンクールで賞ば取ったとです。その時の審査員をされとったのがこちらの先生で、その御縁で野崎君は翌年にこちらに内弟子に入ったとですよ。

晃一
父らしいですね。親の無い子に同情したんでしょう。

藤本
まあ同情されたか本当に才能を見込まれたか、そこは亡くなった先生にしか分からん話でしょうが、とにかく、野崎君は泰山先生が亡くなるまで、十九年間ここでお世話になったとです。ですから、この家の息子さんである貴方が、野崎君のことをご存じないのはおかしかって思ったとですが、

晃一 私はフランスに二十年以上いましたからね。

藤本 ほくそがん長く、

晃一 実は私も絵描きを目指していた時期があったんですよ。でも父と同じ日本画はやりたく無くて、西洋絵画です。それで高校からフランスに留学したんです。

藤本 なるほど。

晃一 ところが、あちらに行つてすぐ自分には才能が無いことに気づきました。だから、絵はそれこそ簡単に諦めたんですが、あちらの生活の方は私には非常に快適で、そのままフランスで大学に進み、卒業しても父が亡くなるまで日本には帰らなかつたんです。

藤本 一度もですか。

晃一 ええ。たまに季節のあいさつを葉書で送るくらいで、ちゃんとした連絡もせず。今更ですが、本当に親不孝でした。

藤本

そうですね。いやしかし、息子なんてそがんもんですよ。男の子は薄情ですけん。あ、失礼、私にも息子がおつて。いや、うちの息子

はもつと酷くてですね、

晃一 藤本さん、

藤本 はい、

晃一 私の質問は、貴方がどうして野崎さんを探していらつしやるのかということなんですが。

藤本 あくそうそう、そうでした。その説明をする為に野崎君の生い立ちを話しとつたのですが、実は、こちらの先生が亡くなられたとき、つまり一昨年の秋、野崎君は唐津の養護施設に手紙ば書いとります。

晃一 手紙を、

藤本 はい、長い間世話になった先生が亡くなられた、悲しいがこれを機に、自分はこのを出て独り立ちするつもりだ、身の回りのことが少し落ち着いたら一度唐津に戻って施設にも顔を出す、唐津の海をまた見てみたいいちゆうて。

晃一 なるほど。

藤本　しかし、実際はその手紙を最後に、野崎君は唐津には帰って来なかったとです。消息が途絶えてしまったとです。

晃一　それで、どうして貴方が。

藤本　はい、その手紙は、私の友人だった園長に宛てた手紙だったとです。

晃一　じゃあ、貴方はその園長に頼まれて、

藤本　いや、園長はさっき言いましたように三年前に亡くなつとりまして、私に手紙ば見せてくれたとは、後を継いだ娘さんです。だから今の園長ちゆうことになります。施設にいた頃の野崎君には妹のご可愛がつて貰つたつて、野崎君のことを気にしとりまして、ばつてん調べようも無かしてつて、それで、じゃあ私がつて、

晃一　藤本さん、貴方は…。

藤本　はい、昔警察に勤めとりました、生活安全課に長い事。

晃一　刑事さん、

藤本　ばつてん、もう何年も前に退職して、家でぶらぶらしとりましたけん、でしゃばつたとです。

晃一
なるほど。

藤本
話が長うなってしもうて、すみません。

晃一
：どこかで、絵でも描いていらっしやるんじゃないですか。

藤本
え、

晃一
ですから、野崎さんですよ。どこかで今も絵を描いているんじゃないですかね。独り立ちをすると仰ってたんでしよう。

藤本
しかし、戻ると言つてそのまま音沙汰なしになったのが気になるんですよ。

晃一
私には、大人になった彼がそんな施設に今更顔を出すことの方がおかしい話に思えますが。

藤本
そがんですか。

晃一
そうですね。手紙なんて、気まぐれで出したんじゃないですか。まあ、絵を続けているかどうかはともかく、きつとどこかで元気にしていますよ。

藤本

そうかも知れんです。ばってん、私は誰かが野崎君のことを忘れちゃいけないような気がするとですよ。

晃一

どうしてですか。

藤本

親も兄弟もなく育った彼が、子供の時に時養護施設を出て、二十年近くどんな人生を歩んできたのか。葉書一枚残して消えて、誰からも気にとめられなかったら、寂しすぎるじゃないですか。

晃一

藤本さん、あなた、

藤本

彼が、それからどうなったのか…生きとるとか、死んどるとかも分からん…寂しすぎるでしょ。施設を出てここに来た時、野崎俊介君はまだ中学に上がる前の子供だったとですよ。

照明変わり転換明かり、上手の入口より、藤本の視線の先に小学生の野崎俊介を連れて若い頃の八重子入ってくる。入れ替わりで退場する晃一と藤本。舞台明るくなる。俊介は鞆を持っている。

八重子

いつもの事だけど、先生何も仰らないから。突然荷物が届いて佐賀とか唐津とかって、これ何ですかって話になるじゃない。そしたら「ああそれね、明日本人も上京するよ」ですって、まったくもう。

驚いたわよ。(言い終わり俊介を見る)

俊介
：はい。

八重子
あのね、同居人が増えれば当然私の仕事も増えるのよ。でも先生そんなことこまったく分かっていらっしやらないの。

俊介
はい。

八重子
まあ、別にあなたのせいじゃないけど。とにかく、先生ってそういう人だから、あなたも話は先生から伝わってるなんて思わないでください。必要な事は直接私に話して貰わないと困るから。

俊介
はい。

八重子
荷物はあれで全部なの？段ボール箱一つ。

俊介
はい。

八重子
そう。とりあえずあなたが使う部屋に入れといたから、後で案内するわ。

俊介
はい。

八重子 先生すぐにお見えになるから、ここで待つてて。

俊介 はい。

八重子 あなたね、はいはいつて、他に何か言う事無いの。

俊介 …他に？

八重子 (ため息)行きがかり上だけど、一応私があなたの世話もする事になるの。そういう場合、普通はよろしくお願いしますって言うの。

俊介 …よろしくお願いします。

八重子 遅いわよ。

俊介 …はい。

八重子 私はね、子供だからって優しくなんてしないわよ。礼儀や常識無かったら他人の家に世話になる事なんて出来ないんだから。

俊介 …。

八重子

あのさ、黙り込むんじゃないの。ここで生活するんだったらもつと
愛想良くしなさい。

俊介

…(頷く)

八重子

ったくもう。(俊介を睨む)いい、見てなさい。(いきなり俊介の鞆を
取る)

俊介

あ、

上手に引っ込み、すぐに出て来る八重子、小芝居を始める。

八重子

いやあ、立派なお屋敷ですね。こんな所でお世話になれるなんて夢
のようです。それにあなたのような美しい人がお手伝いさんだなん
て、やっぱり東京はすごいですね。何分僕田舎者で、こちらの事は
右も左も分かりませんので、どうぞ宜しく。あつこれつまらない物
ですが良かったらどうぞくって、こんな感じでびっかぴかか笑顔で
手土産の一つも渡したら、その後の生活が円滑に進むって事、分か
った。(俊介、無言で鞆を取り返す)…何よ。

鞆から新聞紙の包みを取り出し、八重子に差し出す。受け取る八重子。

八重子

何これ、

俊介 …… 早目に食べて下さい。干物ですけん。

八重子 …… ですけん？

上手より、泰山登場。

泰山 おく俊介君、良く来たね。待ってたよ。

八重子 先生、これお土産だそうです。(泰山に渡す)

泰山 ん？そうか、それはそれは。開けてもいいかい。(頷く俊介、包みを開く泰山)お、鰹にカマスか、美味そうな干物だ。

俊介 …… 園長先生が…。

泰山 持たせてくれたのか。お礼の電話しなくちやな。玄界灘、対馬海峡、あの辺りの魚は美味い、特に鰹は本場だから。ありがとう。(八重子に渡す)長旅で疲れただろう。(首を横に振る俊介)八重子さん、何か飲み物、ジュースでも出してやって。

八重子 はい。(上手に退場)

泰山 まあ座りなさい。(促されソファに腰を下ろす俊介)ここ、学校は近いんだよ。転校するのは初めてだね。

俊介 はい。

泰山 心配しなくていい。この間担任の先生にも会って頼んできた。優しいそんな女の先生だった。絵だけじゃなくて学校の勉強もしっかりやるんだよ。

俊介 はい。

泰山 まあ、とりあえず今日はゆつくりしたらいい。

俊介 あの、

泰山 何だい。

俊介 今日は、掃除や洗濯は良かですか。

泰山 うん？

俊介 僕は構わんです。そがん疲れとらんけん、すぐに始められます。雑巾やバケツのあるとこば教えてください。そいから洗濯も洗濯機の

使い方とか教えて貰えたら：洗濯機はどこにあるのですか。

泰山 俊介君、ここには何をしに来た。

俊介 え？

俊介 絵を学びに来たんだろ。

俊介 はい。

泰山 だったら掃除や洗濯の事は心配しなくて良い。

俊介 ばってん、

泰山 園長先生に言われたのか？

俊介 はい。

泰山 いいか、ここでのお前さんの仕事は、学校の勉強と毎日絵を描く事だ。家事手伝いはほら、さっきの八重子さんがいるから。

俊介 …絵ば、描くだけで良かですか。

泰山

園長先生に何て言われたんだ。

俊介

：住み込みの弟子は、炊事、洗濯、掃除、何でもやらんばいけん。信長の草履ば懐に入れて暖めとった秀吉のごとせんばいけんって。他人の家のご飯ば食べさせて貰うっていう事はそういう事たいて。

泰山

そうか。しかしそれは園長先生がお前さんの事を心配して言ったんだ。お前さんがここで可愛がられるようになって、そう思ってたんだ。確かにそんなやり方で弟子を鍛える先生もいるだろう。だけど、私はそういうタイプじゃない。

俊介

先生は、どがんタイプですか。

泰山

お前さんはこれから私と一緒に暮らす事になったんだから、言わば家族になるようなもんだ。私はそう考えてる。

俊介

家族、

泰山

そうだ。だから私には何も遠慮は要らない、言いたい事があつたら何でも言いなさい。

俊介

：はい。

泰山

俊介って呼んでもいいかい。

俊介

はい。

泰山

じゃあ俊介、お前さんどうしてここに来ることにしたの。園長先生から聞いたけど、最初は東京には行きたくないって言ってたんだろ。

俊介

…はい。

泰山

じゃあ、どうして。

俊介

園長先生に見せて貰ったとです、画集を。

泰山

画集、

俊介

(鞆の中から画集を取り出す)こいです。

泰山

ああ私の、

俊介

園長先生が図書館から借りてきて、見せてくれたとです(画集を捲り)この絵も、この絵も…凄かって思ったとです。

泰山

そうか、気に入ってくれたか。じゃあ私の絵は合格点だったんだ。
(俊介、笑顔)でも、それじゃあこれは図書館の？

俊介

違います。図書館の画集はもちろん返したとです。

泰山

そうだよね。

俊介

自分で貯めたお金で買ったとです。新聞配達ばしとったけん。

泰山

新聞配達して、買ったのか。

俊介

はい。そして、先生の描く絵のごたるとば描きたかって思ったとです。だから先生に習いたかって。

泰山

私が描くような絵か、

俊介

はい、

泰山

嬉しいけど、私の絵の何処が気に入った。

俊介

先生の絵は、何かぼんやりしとるけど、良かです。

泰山

ぼんやり、

俊介

はい、ばってん、はっきりもしとるとです。

泰山

ぼんやりしてるけど、はっきりしてる？

俊介

はい。点々がいっぱいぼんやりしてるっちゃけど、そいが優しく見ゆつとです。

泰山

それは点描という画法だよ。小さな点の集まりで色や形をえがく描き方だ。それが優しく見えたという事か。で、はっきりと言うのは？

俊介

絵ば描いとる先生の気持ちちがハッキリ分かる気がすつとです…ただ、分かつたごたる、そがん気のするだけばってん。

泰山

ほう、描いてる時の私の気持ちが分かるような気がする…。

俊介

気持ちだけじゃ無かです。この花ば見た時、うわく綺麗かねうつて声ば出しそうになつたやろとか、この月ば見た時には涙の出そうになつたやろね、とか。そがんとがハッキリ見えたごたる気のすつとです。先生が何でそいば描きたかつて思たとか、ハッキリ分かる気がすつとです。

泰山

…そうか。

俊介
そいけん、妻か絵ばいって思ったとです。先生と同じ絵は僕も描けることなりたかって思ったとです。

泰山
それは光栄だ、ありがとう。でも、私の絵なんて目指さなくていい。

俊介
…何ですか。

泰山
…お前さんは、私の思った通りの子だね。

俊介
え、

泰山
俊介、私もコンクールのお前さんの絵を見て、「妻かって」思ったんだ。

俊介
…嘘です。

泰山
嘘じゃない、本当だ。

俊介
僕の絵は、全然駄目です。

泰山
何故そんな事言う。

俊介

僕の絵は……子供の絵です。

泰山

そうか。確かに技術的にはまだ子供の絵だ。だけど俊介もいつか大人になるだろ。

俊介

でも、

泰山

本当に駄目な絵だったら、私は俊介をわざわざ東京に呼んだりしない、そう思わないか。それに絵を描くには歳も立場も関係ない、上手い下手なんてこともどうでもいい。

俊介

上手くなるために一生懸命勉強せんばいかんとじゃなかとですか。

泰山

うん、そりやそうだ、私だってもっと上手くなるようになって毎日頑張ってる。しかし、そんな事どうでもいいとも思ってる。絵を描くのに本当に大事なのは(胸に手)ここだから。

俊介

……(胸を)

泰山

感じる心だ。そして俊介にはそれがある。俊介の絵はそこが凄いだ。いいか、私は絵を教えるために俊介を東京に呼んだんじゃないよ。

俊介

：絵ば、教えるためじゃ無かとですか。

泰山

うん、違う。

俊介

そしたら何で、

泰山

教えるためじゃやない。私は、俊介の絵を見て思った。あくこれを描いた子は、驚くほど「感じる心」を持っているな、この子にずっと絵を描き続けて欲しいなあって、そう思ったんだ。

俊介

描き続ける…。

泰山

そうだ。だけど…その子の住所は施設になってた。誤解しないでおくれ、同情したんじや無いんだ。私はお前さんの絵を見て、この子ももし絵を続けられなくなったら勿体ないって、そう思ったんだ。だから私は、私のわがままで俊介を東京に呼んだんだ。

俊介

：でも、僕の絵は、そがん…。

泰山

自信を持ちなさい。お前さんはいいものを持つてる。だから私の絵と同じような絵なんて描かなくていい。俊介はここでただ力の限り自分の絵の「心」を磨き続けたらしい。

俊介

…絵の、心ば磨く、

泰山

俊介、お前さんはね、今はまだ種なんだ。

俊介

種、

泰山

私が、水も光も肥料も、いっぱい用意するから、ここで思いつき根を張って、枝を伸ばし、葉を広げて、いつか俊介の花を咲かせたい。

俊介

…よう、分かります。

泰山

そうか。まあ、おいおい分かる日が来るよ。描き続けたら欲が出る。誰かの真似じゃない自分の世界が欲しくなる。自然にそうなる。それでいい。

俊介

先生、

泰山

何だい。

俊介

よう分からんばってん、先生は良か人です。そいは分かります。

泰山

そうか。唐津を出た事は後悔してないか。

俊介　しとらんです。来て良かったです。

泰山　そうか。俊介、庭に出てみるか。

俊介　あ、はい？

泰山　シヤクナゲの蕾がほころび出して、ユスラウメにも小さな実がつき始めている。紹介しよう。

俊介　紹介、

泰山　ああ、これからしばらくは私より庭の木や花が、お前さんの先生だ。毎日いっぱいデッサンするんだ。

俊介　（笑顔）はい。

　　転換明りになりシルエットの泰山と俊介が下手奥の出はけ口に向かう。同時に上手より現在の八重子と藤本登場。泰山と俊介の後ろ姿を見送る。泰山と俊介が退場し、向かい合ってソファーに座る八重子と藤本。再び部屋が明るくなる。

八重子

　　まあ、そんな感じで先生は、とにかく自由奔放に、好きにやりなさいって感じでしたから、野崎さん、ここでの暮らしにはすぐに馴染

みましたよ。

藤本　　そうですね。東京の暮らしにすんなり溶け込めたのですか。それは良かった。

八重子　良かったって、どちらにしてももう二十年近く前のことですよ。

藤本　　まあ、そうですね。それで、大人になってからの野崎さんは、

八重子　　…大人になってからですか…あの、藤本さん、もうそろそろ旦那様がお帰りになる時間なんです。

藤本　　はい、

八重子　　そしたら私、怒られちゃいますから。

藤本　　何ですか。

八重子　　旦那様、どちらかという人付き合いがお好きじゃなくて、あまりお客様がおいでになるのを喜ばれない方なんです。

藤本　　そうですね。そしたら私が強引に上がり込んだって言うて下さい。実際その通りですけん。

八重子

そんなこと、

藤本

大丈夫です。それに、この間伺った時、秋山さんにはちゃんと言っていてあります。八重子さんからも話を聞かせて貰いたかった。

八重子

：大人になってからの野崎さんについては、お話する程のことは何も無いんですよ。

藤本

でも、八重子さんは、ずっとここで、

八重子

成長するに連れて、あの人、影が薄れていったんです。

藤本

え、

八重子

て言うか、だんだん無口になって。だから、変な話ですが、ここに来た当時の、まだ子供だった頃のあの人、の記憶の方が、大人になったあの人より良く憶えてる位です。

藤本

そがんですか。

八重子

まあ、子供の頃は、あの人私のことを怖がってたかも知れませんが、随分叱りつけてやりましたから。

藤本

八重子さんがですか。

八重子

はい。でも亡くなった先生とは相性が良かったと思いますよ、先生も子供みたいな無邪気さがありましたから。

藤本

良か先生に恵まれたちゅうことですね。

八重子

善し悪しじゃなくて、先生は浮き世離れた人だったんです。

藤本

変わり者ちゅうことですか。

八重子

良くも悪くも。私なんかがこんなこと言ったら怒られるかも知れませんが、本当は芸術の世界だってそんな綺麗事ばかりじゃ無いと思うんです。何だかんだ言ったって有名になるにはそれなりにお金を使ったり、権威のある人に目をかけて貰うように上手く立ち回ったりするんじゃないですか。

藤本

まあ、どがん世界でも大なり小なり、そいはあるでしょうな。

八重子

でもうちの先生はただ良い絵を描く事だけ考えてる人でしたから。まあ純粋と言ったら純粋なんでしょうけど、ご自分がそんなやり方でも大成してらしたから、それが普通だと思っていらいしたんですね。

藤本 益々良か先生じゃなかですか。

八重子 さあどうでしょう。そんな先生のもとで学ぶのが、弟子にとって本

当に幸せかどうか。

藤本 幸せじゃなかとですか。

八重子 分かりません。でも先生が、まだ子供の野崎さんに、絵のためだつたら何やってもいい、逆に絵の肥やしにならない事は無理してやる必要は無い、なんて仰るから、それこそ大人の言う事なんて聞きやしないんです。だからその頃の野崎さんは、私にはただの生意気な小僧でした。

藤本 そがんですか。

八重子 はい、そがんです。まあ今考えたら、私も少し大人げなかったんですけど、あの子が一人前の芸術家気取りなのが鼻について、ちよつと意地悪もしてやりました。泣かしたこともありましたよ。

藤本 え、

若い八重子(声) ちよつと、いい加減にしなさいよ。

転換明りになり過去。シルエットの藤本と八重子が下手奥の出はけ口から退場。同時に上手より少年の俊介登場。続いて若い頃の八重子、俊介を追いかけて登場。

八重子 (俊介の腕を掴み) 待ちなさい。

俊介 すぐに戻るって言いよるじゃなかね。

八重子 何言ってるの、あんたまったく躰がなってるんだから、私はあんなの親代わりなの、言う事聞きなさい。

俊介 八重子さんが僕の親代わりって誰が決めたと。そがん話は聞いとらんもん。

八重子 もしあんたに親がいたらこんなこと絶対許さないって、そう言ってるの。

俊介 僕に親はおらん。ここでの親代わりは先生たい。僕は先生の言うことば聞く。先生は絵のためなら好きにして良かって言わした。

八重子 イワシタ？

俊介 そいけん、仰った。

八重子

誰がなんと言おうと、病気でも急用でも無いのにご飯食べてる最中にいきなり「ちよつと外に出ます」なんて、馬鹿じゃ無いの。

俊介

先生は、感じる心ば大事にしろって言わした、あ、仰った。感じたその瞬間にその心ばスケッチブックに残せて仰ったと。

八重子

ああそう。あのね、先生は確かに絵描きとしては凄い人だけど、はつきり言って世間の常識ってものがまるで分かってらっしやらないの。だからしょうが無く私があんたに常識を教えてやってんの、分かった。

俊介

世間の常識ちゆうとが、芸術の一番の敵って先生は仰った。

八重子

ああ言えばこう言う、ほんと生意気。

俊介

だけん、絵の勉強の為って言いよるじゃなかね。

八重子

何でもそう言えば済むと思ってるでしょ。

俊介

本当たい。この時はずっと待ったと。

八重子

はあ？何を待ってたって。

俊介 立葵に陽の射すとば。

八重子 ……夕チ、アオイニ、ヒノサストバ、何？

俊介 立葵は、花たい。裏門の木戸の脇に咲いとる、背の高か花たい。

八重子 その花が、どうしたのよ。

俊介 だけん、その立葵ちゆう花に、太陽の光が当たるとば、ずっと待ったと。

八重子 花に、日が当たるのを待って、どうするのよ。

俊介 僕は、先生の作品にある「雨上がりの立葵」が好いとつと。先生の描いた立葵は、花や葉っぱに雨の水滴ばいっばい付けとる立葵たい。その水滴が、澄んだ空気の中、お日様の光で蒸発して、せいこそ命の湯気ばいっばい立てながら、青か空にすくくて伸びとる、本当に凄か絵たい。

八重子 それで。

俊介 先生が絵にしたその立葵が、先週から花ばつけ始めたと。ここのと

ころ天気はずつと良う無か、何日も曇つとる。そいけん僕はもう何日もずつと立葵ば見とるとよ。雨が降るつちやなろかかって、そしてたらそのすぐ後にお日様が出て、あの絵と同じ命の湯気ばいっばいあげとる立葵ば見られるとじやなろかかって。今朝、にわか雨の降つたやろ、今、ご飯食べよつたら、庭に陽の射したとよ。

八重子

それで。

俊介

分からんと。今行つたら、あの絵と同じ立葵ば見られるかも知れんとよ。先生の絵にある、あの立葵ば。

八重子

…やっぱりムカツク。

俊介

…何がね、何がムカツクと？

八重子

そういうの氣に入らないって言ってるの。

俊介

そいけん、何が氣に入らんとね。

八重子

何よ、子供のくせに、大人を馬鹿にして。

俊介

馬鹿になんか、しとらんよ。

八重子

してるじゃない。絵を描かない人間を見下してる。絵描きじゃなかったら人間じゃ無いって言ってるように聞こえる。

俊介

…意味が、分かんんです。

八重子

そりゃ先生は有名な絵描きさんだし、あんたは小僧だけど一応その弟子よ。でも私は絵なんてまったく分かんないし、もちろん描けないし、はっきり言って初めっから興味も無いもん、それが何よ。誰にだって自分の得意分野ってのがあんの、分かる。

俊介

…人は、それぞれって、言いたかど？

八重子

そうよ。

俊介

…うん…八重子さんの、得意分野は何ね。

八重子

…テレビドラマ。

俊介

…そうね。

八重子

今、笑った？

俊介

笑つとらんよ。

八重子

…。

俊介

あの…僕はただ、一生懸命に、

八重子

私だって一生懸命やってわよ。

俊介

…えっと…一生懸命、何をやっとなると。

八重子

やっぱり馬鹿にしてる。

俊介

馬鹿になんかしとらんで。

八重子

あのね…あんたはさ…あんたは、湯気が立ってる雨上がりの花を見たいかもしれないけど…私は、湯気の立った味噌汁に、にっこりする顔が見たい。

俊介

え、

八重子

ていうか、私だって少しは、先生やあんたに…何ていうか…とにかく普通に、ちゃんと食べてよね。

俊介

…八重子さん…そうたいね…ごめんなさい。

八重子

今更謝っても遅い。

俊介

…ごめんなさい、八重子さん。

八重子

もういい。

俊介

そうやった、そうやった、ごめんなさい。

八重子

ちよつと、もういいって、

俊介

(泣き始める)八重子さんの気持ちば、ごめんなさい。

八重子

何泣いてんのよ。ちよつと、泣かないの、(俊介号泣)え、ちよつと、

泰山

(下手奥より登場)おい、俊介どうした？

八重子

あ、先生、

泰山

八重子さん、何かあったのかい。

八重子

いえ、これはあの、

俊介 (泣きながら) 僕が、僕が悪かいです。僕が、

八重子 (泰山の視線を感じ) だから、あの、これは…。

照明変わり、曲が流れ、時の経過。現在の八重子と藤本の声が聞こえてくる中、舞台中央手前に歩み寄る泰山と俊介。スケッチブックを開いて見る二人。そんな様子を奥から見守る若い頃の八重子

藤本(声) 八重子さんも若かったとですね。

八重子(声) それでも三十路をとくに過ぎてましたから、小学生を相手に恥ずかしい話です。

藤本(声) いやいや何か、微笑ましかですよ。

八重子(声) あれは焼き餅でしたね。先生は年の差も師弟の垣根も越えて、絵の事になると夢中であの子に語りかけるんです。

藤本(声) そがんですか。

八重子(声) はい。先生の話聞くあの子も目をキラキラさせて、一言も漏らすまいって、それはもう一生懸命で、そんな時は私なんて空気ですよ。